

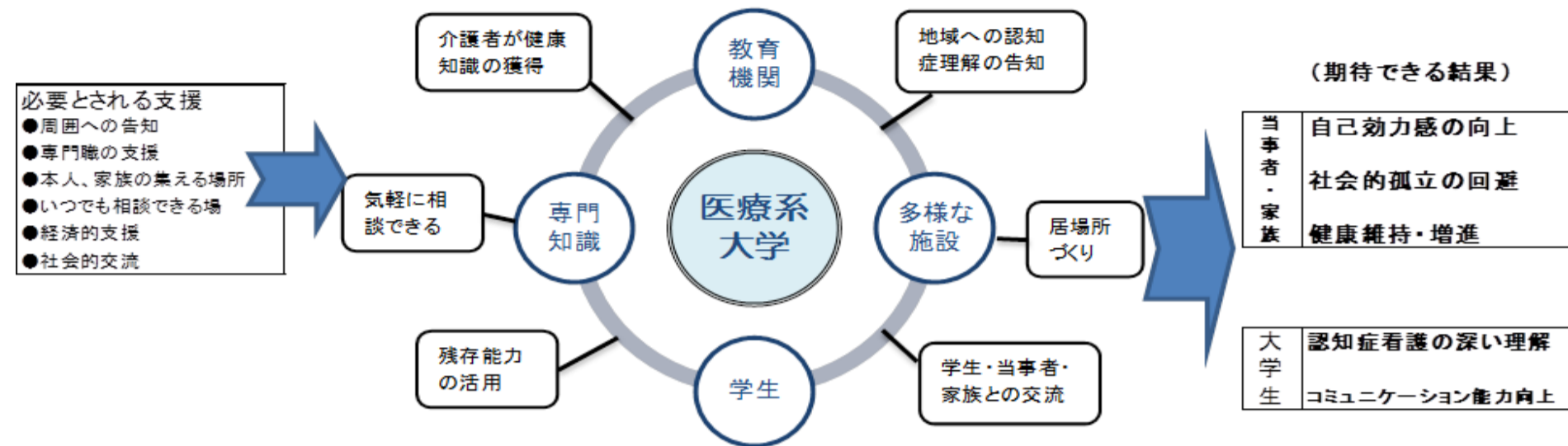
若年性認知症を支えるODAWARAプロジェクトへの大学参加事業の効果

山田智美¹ 吉村恵美子¹ 矢代実希¹ 相内恵津子¹ 峯尾生恵² 浅川健恵³

1 国際医療福祉大学小田原保健医療学部 2 しきさい館(若年性認知症カフェ主催者) 3 小田原市立病院

諸言

若年性認知症とは、65歳未満で発症した認知症の総称である。平成27年度に厚生労働省より出された新オレンジプラン¹⁾でも若年性認知症への居場所づくりを掲げている。しかし、現在の社会サービスは高齢者中心であり、体力・能力共に高いままである若年性認知症当事者(以下当事者とす)には、高齢者とは違う社会支援や居場所づくりが必要である。また、同時に家族の困難性も大きく、山梨は「本人の困難のみならず、周囲に及ぼす影響が大きい。」²⁾と述べており、介護者のストレス軽減も必要である。当事者や介護者にとっての居場所づくりとして、ゆっくりできる空間や仲間づくりが求められる。さらに、自己効力感を高めることが介護負担感を軽減できるとの報告もある。そこで、地域の中で、**当事者の能力を活かした場と生きがい作り、当事者と家族の自己効力感を高める場として医療系大学は活用可能な重要な社会資源となり得ると考えた。**同時に、大学内での開催することで当事者と家族との関わり医療系の大学生が持つ傾けが、学生にとって認知症当事者への理解が広がるとともに、良い経験となる。この活動を通して地域の認知症への支援意識を高めるとともに、大学の地域住民との共同意識を持つこともできると考える。



1. 目的

若年性認知症当事者と家族が安心して過ごせる居場所づくりに大学として参加することにより、地域の大学としてサポートできる効果を知る。

2. 方法

対象者: 若年性認知症ODAWARA家族会に所属している当事者及び家族

方法: 年間を通して、若年性認知症当事者と家族が参加できるイベントを開催する。

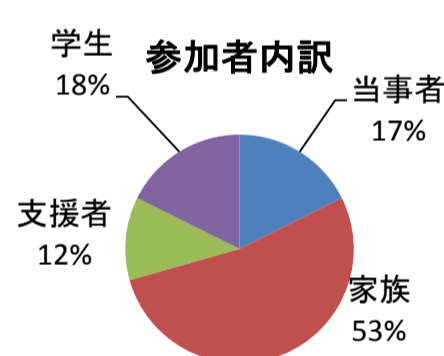
- ① 若年性認知症当事者と家族及び支援者へのアンケート調査を行った。(昨年)
- ② アンケート調査の結果をもとに大学構内で、学生と共に開催できるイベントをプロジェクトメンバーと共に企画する。
- ③ 広報を行い、参加者とボランティア学生を募る。
- ④ 企画終了後は、毎回アンケート調査を行い、企画についての評価を行う。
- ⑤ 企画内容についてホームページや認知症カフェブログを通じて情報を発信する。

4. 結果

時期	名称	参加人数 (赤字:学生)
6月	学食&卓球大会ツアー	13名(4名)
9月	学生の実習前技術練習への参加	1回目 11名(22名) 2回目 12名(22名)
10月初旬	学校祭参加出典	5名
10月下旬	市民公開講座参加支援	5名

《学食&卓球大会ツアー》

- ◆ 新校舎体育館にて卓球を実施。学生ボランティア(卓球部所属)主導してもらった。
- ◆ 当事者は笑顔で玉を打ち返し、家族は当事者と離れて体を動かすことを楽しむことができていた。



アンケート結果より(一部抜粋)

- 卓球で皆様が体を動かす楽しさを感じることができた。知らなかった卓球の達人もいらつやいました。
- 時間を忘れて楽しく卓球をさせていただきました。人と対面でのいろいろ話をしたり聴いたり、ストレスの解消になりました。
- 若い生徒さんと直接会話することで学生時代に戻ったような気がします。とても楽しかったです。良い汗もかかせてもらいました。
- いろいろの面でも(身体機能不全など)ご配慮いただきましてありがとうございました。
- 久しぶりのピンポン楽しかったです。疲れました。学食はとてもおいしかったです。また食べたい。
- きれいなロケーションの学校を見学できて、とてもうれしく思いました。新鮮な気持ちでした。かつての思い出の母校跡地でもあるので、大樹や海の風景を見て少し胸キュンでした。私的には苦手なのですが、卓球をさせていただいて、皆様がとても喜んでいたので良かったです。

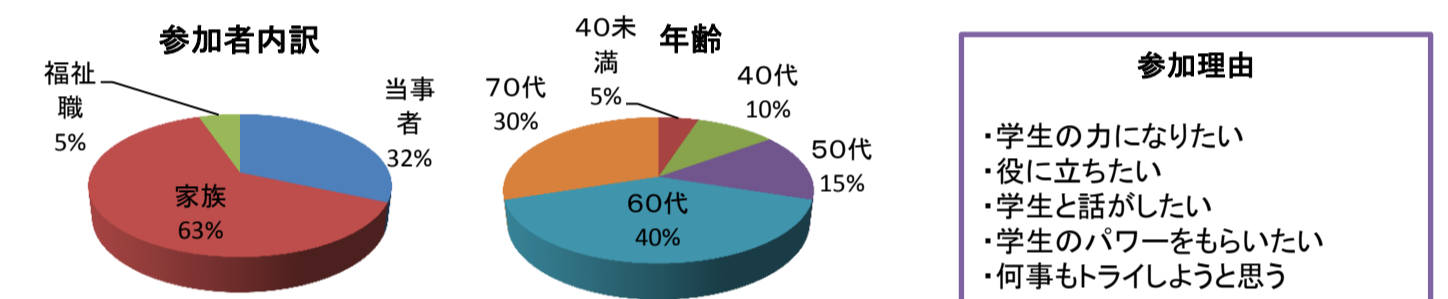


3. 倫理的配慮

- 企画は、比較的体調が安定する午後とし、集中力を考え2時間程度のものとした。構内は歩行での移動だが、必要に応じて車椅子やリフト、休憩できるような椅子を移動箇所に設置するなど参加者の心身の安全へ配慮した。
- 企画への参加が強制にならないよう応募制とした。
- 対象者に研究の趣旨を文書および口頭にて説明し、同意を得て実施した。
- 企画内のアンケートへの記入については口頭とアンケート内の文書で説明し、アンケート回収にて同意とした。
- HPやブログに掲載する場合は、当事者や家族へ了承を得ておこなった。

《学生の実習前技術練習への参加》

- ◆ 学生と多くかかわりたい、学生の勉強の役に立ちたいとの当事者及び家族からの要望により、学生の実習前技術練習の参加を企画した。
- ◆ 対象学年: 3年 老年看護実習初日
- ◆ 所要時間: 1時間
- ◆ 実施内容: バイタルサイン測定、呼吸音聴取等



★当事者感想より

- 学生の指示に従わなくて困らせてしまいました。実習の時にこの経験を活かしてほしいです。
- とても楽しい時間を過ごさせていただきました。たくさん話が出てきてうれしかったです。
- 学生さんと色々お話ができ、勉強になりました。
- とても楽しかったです。

★家族の感想より

- お互いに緊張していました。リラックスして実習に行っていました。
- なかなか自分の血圧等を測ることがなく、良い経験をさせていただきました。
- 楽しい会話ができ、和やかな場でした。コミュニケーションは大切だと思いました。
- 学生さんたちの頑張りがよくわかりました。
- 2回目の参加と言うことでリラックスして受けることができました。生徒さんとの会話も楽しかったです。
- 認知症の妻によく対応していただきありがとうございます。

★学生の感想より

- 同じバイタル測定でもその人にとってどのやり方が一番良いかと考えて行うことが大切だ。
- 認知症のある方とどのようにコミュニケーションを取るかどのように関わっていくかしっかりと考えていくことは大切であると感じた。
- 自分が想像したよりも、患者さんが思うように動いてくださらなかったり、自分の技術不足で手間がかかってしまい焦りが生じてしまった。
- 事前に練習をさせていただいて良かった。病院で患者さんと接するとすごく緊張してしまうけど、学校で患者さんと接するので緊張せずにでも手技はしっかりやることができました。



5. 考察

今回のイベントでは直接、若年性認知症当事者と家族からの希望を取り入れることができた。卓球では当事者は、受身の姿ではなく、積極的に動く姿が見られた。当事者は若く体力もあるため体を動かすことができる。体を動かすことは適度な疲労感につながり、エネルギーを発散できるということでも心の安定につながる事が期待される。介護者も当事者から離れて汗を流しており、自然と笑い声が聞えるなど、体を動かすイベントは双方にとって効果が高かった。ボランティアの学生は普段から卓球を行っているため決まったところへボールを返すことができ、当事者も楽しむことができていた。身体を動かすことは、主観的健康観につながる。またこれは体育館と学生という大学の環境により実施できることである。

技術練習では学生の真剣に行っている様子に触れ、当事者や家族は自ら感じていることを開示したり、学生にアドバイスをしたりする姿が見られ、自己効力感の向上につながった。田中らは、認知症の家族の自己効力感は一般高齢介護者より低く、生活満足度と正の相関にあると述べている。³⁾これより、学生を通して得ることのできた自己効力感は生活満足度につながると考える。さらに、学生とのコミュニケーションを通じて人とつながり、社会とのつながりを感じることができた。学生にとっても認知症当事者とのやり取りが学習の意欲、知識となっている。以上のことから、今回行ったイベントは、若年性認知症当事者及び家族への支援につながる効果が得られたと考える。

6. 結論

- 大学の環境を生かしたスポーツなどのイベントは当事者及び家族への楽しみの場所としての居場所づくりや主観的健康観の向上につながる可能性が示唆された。
- 学生の練習に参加することで、当事者及び家族の効力感の向上を図ることができた。
- イベントを通して当事者や家族は大学生を通じて社会とのつながりを実感することができ、大学生は認知症理解のてがかりとすることができた。

おわりに

昨年からODAWARAプロジェクトの一員として大学でできるイベントを開催し好評を得ることができていた。今までは大学の特色を生かし、若年性認知症の方が興味を持てる内容を考え提供していたが、今回は当事者や家族からの要望を取り入れることができ、自己効力感を高めることができた。終了後にアンケートを実施し、イベントの効果を知ることができたが、客観的な評価をするまでに至っていない。今後も継続していくためにも評価をしていく必要がある。また、地域の幅を広げ、ホームページを通じて他地域との交流を図ることで若年性認知症当事者や家族への支援に大学が一役担うことが望ましいと考える。

謝辞

企画・研究にあたり協力いただいたodawaraプロジェクト様、大学関係者、何より企画に参加いただいた来訪者・学生ボランティアに感謝いたします。

*掲載させていただいた写真はご本人に承諾をいただいています。

国際医療福祉大学若年性認知症ODAWARAプロジェクトホームページ
<http://jakunenninchiodawara.web.fc2.com/>

本研究は国際医療福祉大学学内研究費の助成を受けて行っています。

引用・参考文献

- 1) 厚生労働省. 2009. 若年性認知症の実態等に関する調査結果の概要及び厚生労働省の若年性認知症対策について <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/03/h0319-2.html>
- 2) 山梨恵子. 若年性認知症ケアの現状と課題: NLI Research Institute Report 2011: 10-19
- 3) 田中正子ら. 認知症における家族介護高齢者の生活満足度とストレス及び自己効力感との関連——一般高齢者との比較——宇部フロンティア大学看護学ジャーナル Vol.4, No.1, 2011